

多文化主義思想における他者性の否認

——批判的人類学の挑戦に学ぶ——

鈴木起生

【要旨】

本稿は、他者の包摂をうたう多文化主義思想において他者性が認められない逆説的状况を問題化し、批判的人類学の挑戦がこうした多文化主義思想の限界を批判し乗り越えていくために生かせることを主張する。この仕事は、「異質な他者といかに関係を築くか」という問いに応じるために異なる知の領域同士の生産的な協働をはかる、というより大きな研究プロジェクトの一部をなす。

この試みの一環として、本稿は人類学的批判理論家ガッサン・ハージの研究を再構成する。多文化主義に対する鋭い批判で知られるハージは、他者の排斥・包含の連続性を理論的に解明するとともに、この一組の統治機構にとらわれない社会関係を探究してきた。この探究に生かされるのが、自己とは根本的に異なる他者性を知ろうとする人類学の営為である。ハージはこの批判的人類学の営為に、異質な他者との別様な関係構築法を探る方途を見出す。本稿は「飼いならし」という鍵概念を軸に、乖離するかにみえる彼の多文化主義批判と批判的人類学を接続する。

最後にハージの議論に対する疑問を検討するなかで、彼の、そして本稿の議論の位置づけが明示される。自他の区分を前提とする立論は、そもそも両者の明瞭な区分などできず、その前提自体が人々のあいだに不要な分断を持ち込んでいるのではないかと問われうる。本稿はこうした疑問を受け止めつつも、自他が暴力的に分け隔てられる政治的状况が議論の背景にあることを再確認する。そのうえでハージの批判的人類学、とくにその多現実論が提起する多元性のとなえなおしが、多文化主義思想の限界を超えていこうとする批判理論の再出発点を示していると主張する。

【キーワード】 他者性、飼いならし、多現実論

一 序論

本稿は、他者の包摂をうたう多文化主義思想において他者が認められないという、逆説的状況を問題化する^①。そのうえで、批判的人類学において展開されてきた自他の関係性をめぐる議論をたどり、それが他者性を否認する多文化主義思想を批判し乗り越えていく試みに生かせることを主張する。

本稿の仕事は、「異質な他者といかに関係を築くか」という問いに応じるために異なる知の領域同士の生産的な協働をはかる、というより大きな研究プロジェクトの一部分をなす。他者との関係構築法の探究は、他者性が暴力的な排斥と表層的な包含に同時にさらされる現代社会において、喫緊の社会的・学問的課題となっている。排外主義運動と多文化主義的言説の併存に代表されるような、他者性の排斥と包含の同居はどのように理解しうるか。こうした閉塞状況を打開し、排斥でも包含でもない関係を他者と築いていく思想実践があるとするれば、それはどのようなものか。現代ではこうした問いをめぐって多くの知が蓄積されてきたが、それらは異なる諸領域に散在し、互いに十分な知見の往還がない状態にある。本プロジェクトはこれらの孤立した知の群島をつなぎ合わせ、共通の問いをめぐる多角的な知識生産のネットワークを形成しようとするものである。

こうした試みの一端を担うために、本稿は人類学的批判理論家ガッサン・ハージの研究の再構成をおこなう。ハージは、一九九八年出版の *White Nation* でおこなったオーストラリア多文化主義に対する痛烈な批判によって、とくに多文化主義批判研究の世界で広く知られることとなった。だがその後二〇〇〇年代に入ると、「テロとの戦い」や「文明の衝突」が喧伝される政治文化のなかで、異質な他者への警戒や嫌悪が高まり、多文化主義は社会を分裂させた元凶として攻撃されていく。こうして噴出したナショナリスティックな多文化主義非難言説の大波のなかで、ハージの議論も含め、他者との関係構築法としての多文化主義思想の限界を指摘した積極的批判の蓄積は、消極的非難の濁流に埋もれて見出しにくくなってしまった (e.g. Gordon and Newfield eds. 1996; Povinelli 2002)。

たしかに、過激な排外主義運動が広まり、「わたしたち」／「かれら」という単純化された自他像がポピュラーな求心力を強くもつ現代において、異質性への寛容を訴える多文化主義思想はこの窮状への処方箋と映るかもしれない。実際こうした発想に基づき、多文化主義思想の重要性を訴え、それを現代的状況に合わせてアップデートしようとする議論が生まれている (e.g. 安達二〇一三)。だがこのような研究動向においては、もはや過去の批判的多文化主義研究など存在しなかったかのように、視野の外へと締め出されてしまっている。

目の前で生起する排他的暴力への応答を迫られるなかで、異質性を重視し他者への寛容を説く多文化主義思想に、わかりやすい対応策としての可能性をみることは理解できる。しかしこの喫緊性は、多文化主義思想に内在する諸限界を指摘してきた先行研究を蔑ろにし、それらの限界について検討しなくともよい正当な理由とはならない。なにより、根底において諸限界を抱えたままの多文化主義思想を表層的に繕って再興したところで、それは現代社会の窮状に対する解毒剤ではなく、気休めの鎮痛剤にしかならないだろう。

このような昨今の研究状況下では、ハージを含めた多文化主義批判研究の蓄積を再訪することはそれ自体、極めて重要な意義をもつと思われる。だが本稿ではそれらの諸研究の成果を概括するのではなく、あえてハージひとりに絞って、彼の議論を丹念に追っていく。この選択には二つの理由がある。第一に、ハージによる批判は他の多くの多文化主義批判研究にも通底する問題を問うており、かつそれを理論的に精緻な形で表現している。そのため彼の多文化主義批判を再構成することで、多文化主義批判研究が提起してきた、とりわけ重要な視点を明確化することができる。

第二に、ハージは *White Nation* において多文化主義が根ざす思考様式の限界を突き止めた後、さらにそれを突破していく思考の糸口を追究してきた。この点は他の批判的諸研究と比べても独創性が際立つ部分といえる。というのもそれらの

諸研究は、多文化主義思想の問題点を鋭く突いたが、それに代わる可能性を打ち出す試みを十分におこなってはこなかったからである。他方で *White Nation* 以後、批判的人類学として展開されてきたハージの思想は、多文化主義的思考から根本的に袂を分かつ別様の思考のあり方を理論的に探る、新たな挑戦に乗り出している。

しかしハージの研究におけるこれら二つの領域は別々に受容され、彼自身も多文化主義批判と批判的人類学を明確に結びつけていない。これに対して本稿は、彼が研究の初期から一貫して発展させてきた「飼いならし」という概念を軸とすることで、これら二つの議論がハージの研究のなかでどのように結びついているかを示す。この作業はハージの解釈にとどまらず、彼の議論をより糸として、多文化主義批判と批判的人類学が出会う地点を明らかにするものである。

以下、まず二節でハージによる多文化主義批判の要諦を押さえたうえで、三節では彼の批判の中核に「飼いならし」という概念があることを指摘する。四節では彼の批判的人類学を再構成し、それが飼いならし概念を接着剤として多文化主義批判と結びついていることを明らかにする。最後に五節の結語ではいま一度、本稿が前提とする問い（「異質な他者といかに関係を築くか」）へ立ち返る。そしてこの問いに対して提起されうる疑問と、ハージの批判理論が有する示唆を検討する。

二 ホワイト多文化主義批判

ハージはレバノン出身のオーストラリア移民としての自身の経験を踏まえながら、痛烈なオーストラリア多文化主義批判を展開してきた。その批判の要諦は、移民への寛容を説き「多文化」を称揚する言説が、その実、移民を思い通りに管理できると特権的に自己想像する植民地主義的心性を温存している、という構造の指摘である。

ハージはオーストラリア多文化主義にひそむ管理的権力感覚を端的に示すものとして、「寛容」の語りに着目した。たとえば排外主義的な暴動があった際、首相が「寛容に」と「国民」に呼びかける。このとき呼びかけられている「国民」は、国籍の有無といった法的な意味における国民ではない。寛容にされる客体として暗黙の裡に想定されているのは中東系やアジア系の移民であり、寛容にする主体として想定されているのはホワイトの人々である。ここでは法的な意味での「国民」／「移民」や皮膚の色という意味での「白人」かそれ以外かといった区分ではなく、寛容にされるか否かを選択できない受身的立場に立たされる「第三世界風にみえる人々(third-world-looking people)」と、自分にはかれらに「寛容」にするか否かを選択する権利があるのだと想像する「ホワイトの人々」という、想像上の人間の区分けが現実的な意

味をもっている。

ここでの特徴づけからわかるように、ハージがいう「ホワイト」とは肌の色という観点から定義されるものではなく、「ある特定の『文明化された』文化資本の『近代的な』諸様式を蓄積した人々」(Hage 2015: 150)を意味している(Hage 1998: 55-67)。こうして暗黙の裡に働く「文明」／「未開」のような象徴的に意味づけられた階級的指標に、彼はオーストラリア多文化主義にひそむ植民地主義的心性をみてとるのである。社会成員みなへと平等に差し向けられたようにしてその実ホワイトな主体にしか呼びかけられていない「寛容」の語りは、非公式で法外部の領域においてホワイト／それ以外を線引きし、この恣意的な想像上の線引きの外部に立たされた他者を排斥する。

ホワイトな主体経験は、空間的感覚と深く結びついている。たとえば「移民が増えすぎて社会統合が掘り崩される」といった懸念が表明されるとき、この語りにおいてはすでに特定のナショナルな空間が先取りされ、その想像的な空間を基準に移民が「多すぎる」か否かが裁断されている。そこにおいて「統合」されるべき社会は、「移民」が管理されるべき他者としてまなざされる空間であり、その他者が多すぎるかどうかを自分が判断できると考える主体は「移民」の管理者つまりホワイトな主体なのである。

こうして移民を管理・統治する権力感覚をもつホワイトな

主体のみに「寛容」を呼びかける構造が温存される限り、多文化主義的包含は同化主義的排斥と同根である。なぜならこうした多文化主義は、つねにホワイトな主体から構成される社会空間を再生産しうる範囲内に限って他者を「寛容に」包含する、はじめから限界が設定された多元主義だからである。そこではホワイトな社会空間の構成論理が前提とされ、それにかなう異質性のみが包含され、そうではない異質性は排斥される。ハージはこうした構造をとらえ、多文化主義と同化主義を対極に位置づける言説に抗し、両者を「多文化―同化主義装置」という連続体とみなす。

多文化主義についてのあらゆる「オーストラリアの」政府文書は多様性を称揚するものの、「しかし」あるいは「である限りで」「といった語」とともに、以下のことを確認している。つまりこの多様性が、オーストラリアの結束、中核的価値、等々…を損なうことで存立するべきではない、と誰もが忘れないことである。同化主義は……多様な文化をはじめから「統合し多文化的に称揚するのに適している」ことを確かにするよう配備される、規律技術として存在してきた。多文化主義が多文化の馬たちに、いかにしてかれらの文化を「享受」したい人々によって乗りこなされるかを教えるよう配備されるとすれば、同化はそうした訓練の前に「かれらをくじく」よう配置される技術であった。わ

たしたちが多文化―同化主義装置について現実的に語りうるのは、この意味においてである。(Hage 2011b: para.24)

この文は、ハージの多文化主義批判の要点を端的に表している。ここでハージは既存秩序を脅かさない「限りで」他者を受け入れるという、多文化主義思想における他者性の否認をあらわにさせている。ここであつたわれる「多様性」に含まれる異質性は、自己の側であらかじめ設定された論理・基準にかなうよう切り取られたものに過ぎず、論理・基準における他者の異質性を抹消しているのである。

こうした他者性の否認こそ多くの多文化主義批判研究が突いてきた問題点であり、ハージが初期から一貫して用いていた「飼いならし」概念は、この問題点を理論的に析出するためのものである。またそれは、ハージが多文化主義思想の論難の後に、別様の可能性を見出す批判を展開していく軸となる概念でもある。そこで次節では、この概念について詳しくみていきたい。

三 他者の飼いならしあるいは他者性の否認

「飼いならし (domestication)」概念は、初期の研究から現在に至るまでハージの批判理論の中核に位置してきた。この概念は、レバノンやオーストラリアにおける定住植民者

のナシヨナリズムがどのように経験され、どのような社会空間を生み出しているかを概念化する論考において、はじめて体系的に提示された (Hage 1996)。同論者はナシヨナリズムの調和的包含性と暴力的排斥性が、実践的にはえてして、同じ構造上で表裏一体の関係にあることを論じたものである。

ハージは、継続的に構築されつづけなければならない象徴的統一体というネイション理解に立ち、その構築における他者との関係性を「飼いならし」と「根絶」に二分する。飼いならしの原義は、動物をしつけ、人間の必要性に沿って利用できる家の (domestic) ものとすることである。そして安全な家で安らぎを求める人間にとって、飼いならしえず自分たちの脅威と映る動物はしばしば、その脅威を根こそぎにする (exterminate) 必要のある存在として立ち現れる。ハージはレバノンやオーストラリアにおける定住植民者のナシヨナリズム言説の中核に、こうしたイメージを読み取る。

住みよい家、安らぎの故郷としてのネイション空間において、「価値づけられるあらゆる性質は……通常 (すなわち、家父長主義的言説のなかでは) 母親業、つまり保護、温もり、情緒的・栄養的安心と関連づけられる」 (Hage 1996: 473)。こうした「母」の領域では、帰属主体は母による奉仕をただ享受する子どものように自己を位置づける。そして他者の異質性は、ちょうど飼いならされる動物のように、家に住む「わ

たしたち」にとつて有益で心地よい性質へと変換される。この飼いならされた異質性は、「飼いならす者のニーズを提供するよう形作り位置づけた権力に服従」 (Hage 1996: 479) する、自己の枠組みに沿って切り取られた疑似的な「他者性」ではない。

ナシヨナリストが住まう社会空間の一面がこのような「母」の領域だとすれば、他面は「父」の領域だとハージは論じる。ここで父とは、家父長制的階層構造において母を支配する家の長、ネイション空間の主権意思を意味する。「母なる大地の統治の問題がよきナシヨナルな生活の問題だとすれば、父なる大地の主権と自己構成の問題はネイションの生死の問題である」 (Hage 1996: 480)。そして「ナシヨナリストにとつて、ネイション創設はなによりも承認獲得の問題であり、その承認がなければかれらの (象徴的) 一貫性という意味における」存在そのものが減退あるいは……脅かされさえする」 (Hage 1996: 480) ため、ネイション空間の死活問題はそのまま、その空間に住まい意味を見出す人々の実存的な死活問題となる。

ハージはこの実存的生死の主体経験を、ムスリムに対する暴力を正当化する、レバノン内戦時のキリスト教言説に見出している。そこでは、キリスト教徒が多数のムスリムに囲まれ政治的意思を表明できず、動物的に生存するだけの存在へと還元されている、といった自己像が抱かれていた。そして

あるキリスト教共同体の戦士は、ムスリムが「わたしたち」の存在を脅かすならば、「わたしたちがかれらを殺すか、かれらがわたしたちを殺すかで、その中間はない」(Hage 1996: 483)と語ったという。このような敵／味方の二律背反の思考様式が、ナシヨナリストを支配していたのである。

他者を「家」へと包含する飼いならしは、「家」を脅かす他者の根絶を望む排斥性と表裏一体の関係にある。「家」に父は一人しか必要なく、そこに別様の政治的意思を表明する他者の入る余地はない。しかし同時に、脅威となる他者を排斥することで存立する「家」を心地よい場とするため、意思を削がれ飼いならされた他者が奉仕する。ナシヨナリストの社会空間に住まう主体にとって他者は、かれらが自身の意思をもつ可能性を根こそぎにしたい一方で、意思のない限りで自らの安寧のために奉仕してほしい存在として立ち現れる。つまりこの空間では、意思の領域において他者性を排斥する欲望と、非意思の領域において他者性を包含する欲望とが連続しているのである。

このように他者の他者たるゆえんであるその意思を根絶すると同時に、自己の世界の再生産のために他者を利用しようとする飼いならしこそ、ハージが多文化主義思想の内にもまた見出した論理なのである。多文化主義と同化主義の連続性を論じる先の引用文をふり返れば、そこに動物(「馬」と、その飼いならし(「くじく」というテーマが現れていること

がわかる。他者を歓迎するかにみえる多文化主義言説が、その実意思のある総体としての他者は認めず、ホワイトな意思になかなうよう飼いならされた「限りで」の異質性を包含するに過ぎないからこそ、ホワイト多文化主義と同化主義は連続する「装置」ととらえられる。

この多文化・同化主義装置にしたがえば、ホワイトな主体が飼いならしうる異質性のみが包含され、意思をもつ他者性は根絶の対象となるしかない。この装置の中でホワイトな自己の目に映る「他者」は、すでにして自己の論理に沿うよう整形された後の、疑似的な他者像に過ぎない。他者を排斥するナシヨナリズムと包含する多文化主義、これらいずれにもハージが一貫して見出したのは、自己の似顔絵のような「他者」しか認めることができない、飼いならしという他者との向き合い方なのである。

四 存在することの多元性

四・一 別様の批判―政治

それでは、飼いならしに根ざした多文化・同化主義装置からの出口はどこにあるのか。一連の統治機構を「装置」と概念化する議論は、その機構のもつ遍在的で強力な影響力の明確化に寄与するとともに、その影響力から逃れる空間はどこにもないのか、という疑問を誘発してきた(e.g. Althusser

1968=2001)。つまりこうした議論は、問題とする統治機構の支配性を強調するあまり、それを不変不動なもののように描き出してしまいうるささともなってきたのである。

自己愛的なナシヨナリズムや多文化主義による他者支配の論理を痛烈にあげてきたハージは、同時に、こうした対抗的批判の危うさについても考察を進めてきた。支配に抗する知を提示しながらも既存秩序の支配性を絶対視することなく、そこから逃れ出ていく道を照らす複層的な批判のあり方を、彼は追い求めてきたのである。ハージはこのような批判の可能性を、アンチ (anti) とオルタ (alter) という、批判―政治における二つの作用の協働に見出す。

アンチとオルタの作用はそれぞれ、「既存の抑圧、支配、搾取に対抗したい欲望と、なにかよりよいものを創造したい欲望」(Hage 2015: 84) によって特徴づけられる。これらはより具体的に、「支配と抵抗の空間への注目だけでなく、そうした権力の循環の外にあり、異なる社会秩序の可能性が基礎づけられる空間を求める探究」(Hage 2015: 84) が同等に重要である政治状況下において結びつけられる。既存の支配的な社会秩序に抗する対抗政治 (anti-politics) と同様に、既存のものととは根本的に異なる社会のありようを求める別様の政治 (alter-politics) が重要となる状況下では、批判思想もまたこうした二面性に応じなければならない³。

このようにとらえるハージは、彼がこれまで主に展開して

きたナシヨナリズムや多文化主義に対する対抗的批判に加え、それらの根底にある支配的な統治論理 (飼いならし) のみには回収されない、別様の社会や存在のあり方を探究する批判を展開していく。ハージが人類学の知見を援用するのは、この探究においてである。

彼は歴史的に人類学が別様の批判―政治と親和的であったとして、その伝統を批判的人類学の思想と呼ぶ。自己が生きる世界と根底的に異なる世界のありようを記述する人類学は、自己にとつては揺るぎない所与にみえる社会や存在のあり方を、異なる世界を知ることを通して相対化し、その再考を迫ってきた。そこでは別様の世界のあり方を記述することそれ自身が、支配的とされた現実の見方や存在のあり方を揺るがすことで一つの批判となりうるのだ、とハージは論じる (Hage 2015: 49-78)。

こうした視点に立った彼の批判的人類学は、さまざまな存在のありようを現実に見出し記述する存在様式論と、それを理論的に基礎づける多現実論に大きく分けられる。以下本節では、これらの議論を順に再構成し、ハージの批判的人類学の要点を述べる。

四・二 存在様式論

ハージは存在様式としての飼いならしの批判において、上述のような批判的人類学を具体的に実践してみせた。彼

は特定の主題と関連づけて飼いならし概念を用いてきたが、近年では「一般化された飼いならし (generalized domestication)」として、それを他者や世界と関係する存在のあり方 (存在様式 (mode of existence)) 一般にまで敷衍させて論じている。一般化された飼いならしの「存在様式」を最もよく定義づけるのは、それがあつた一つの世界をつくり出そうと奮闘することである。その世界において存在するに至るあらゆるものの最も顕著な性質は、それがなにかの『ために存在する』ことである』(Hage 2017: 88)。

二、三節でみたように、従来のハージの批判は他者を道具化するこの存在様式をナショナリズムや多文化主義の主体経験に見出し、あばくものであった。こうした批判からいまい歩進み、飼いならしとは根本的に異なる存在様式を現実に見出すならば、それはどのようなものか。その具体例として彼が論じるのは、「互酬的 (reciprocal)」、「相互内在的 (mutualist)」について特徴づけられる二つの存在様式である。

互酬的な存在様式においては、飼いならしの場合と同じく存在は明瞭に境界づけられるが、それは「主に主権の境界としてではなく、接触と交換の点として取り上げられる」(Hage 2017: 120)。他者は自己の「ために (for)」と「より」、相互関係性の内で、自己と「ともに (with)」存在する。その典型としてハージが挙げるのが、マルセル・モースが論じた贈与の関係性である。贈与は部分的に計算的合理

性の延長にありながら、そこには社会関係の全体性のなかで育まれた、利己的な打算性のみにとどまらない余剰が見出される (Hage 2017: 121)。そこでは存在の「現前それ自体が、互酬性を要求する贈り物」(Hage 2015: 188) とみえらる。

次に相互内在的な存在様式においては、自他は排他的に境界づけられた個体同士としてではなく、互いが互いの「内に (in)」あるような状態で共在する。ハージがこの存在様式を論じるうえで借りるのは、人類学者マーシャル・サリンスが提示した「相互内在性 (mutuality)」の概念である。サリンスは親族関係が経験され生きられる仕方を種々の民族誌から抽出し、存在の相互内在性として概念化した。彼によれば、一般に親族とは「互いに属し、互いの成員であり、互いの内に共在し、その生が合わさり相互に依存する人々」(Sahlins 2013: 21) とみえらる。

たとえばグリーンランドにおけるイヌイットの人々のあいだでは、子どもに亡き親族の名を与える実践がみられたが、そのときかれの生の内には受け継いだ名の者の生が共在する。母方の祖父の名を継いだならば、かれは母を「娘」と呼び、父を「娘の夫」と呼ぶという (Sahlins 2013: 6)。ここでは子どもが自己自身であることの一部が、かれの祖父であることであり、二者は互いに切り離せない状態でかれの内に同居している。つまり自己の存在それ自体に、すでに他者の存在が組み入れられているのである。ハージは類似の存在様

式を論じた先駆者リュシアン・レヴィーブルの融即論を参照しながら、「そこではわたしたちを取り囲む人間・非人間の生命力が、わたしたち自身の生命力に寄与していると感じられる」(Hage 2017: 119) とそのありようを特徴づけている。

四・三 多現実論

これらの存在様式に、ハージは飼いならしと異なる別様の可能性を見出す。だが彼の議論においてとりわけ重要なのは、これらを特定の人々(たとえば先住民) やその社会(「未開社会」とされてきた諸社会)、文化に固有のものではなく、人間存在一般の経験に見出しうるものととらえる思考である。この思考は、それに応じた存在のとらえ方を要請する。存在が単一のあり方によって一元的に規定されるというところへ方にしたがえば、存在様式を異にする者同士は交わることはない、互いにまったく別種のものとされるだろう。これに対してハージは、存在が身体を介して外界とかわり合う仕方の多元性をとらえるという、多現実論を展開する。

現実が身体に潜在する……可能性と現実の潜在的可能性との出会いだとすれば、わたしたちが多元的な現実の内に住んでいると考えることは、人間身体がもつ潜在的可能性の多元性を認識することである。それはつまり、身体が

その環境と織り合わされる諸様式の多元性を認識することでもある。(Hage 2015: 86-9、強調は引用者。)

ここで現実とは、現実界と身体という二つの領域の「出会い」として概念化されている。現実界(Le Réel)とは決して象徴的次元ではとらえず、同時に、まさにとらえない「なにか」として、経験可能な現実に限界を定める領域である(Vijztek 1993: 35-9, 125-30)。身体と現実界の潜在的可能性の接合点として現実をとらえることで、現実はずねに身体的かわりに即したものである。この現実論においては、なにか唯一の客観的現実があり、その現実の見方が多様というのではなく、さまざまな身体的かわりそれ自体が別個の現実を生み出すととらえられる(Hage 2015: 203-5)。つまり個々の存在がその身体を介して、外界とさまざまな形でかわるところに、多くの現実が生まれる。身体とは、社会的な関係の網の内に位置づけられ、多くの現実が交差し絡まり合う出会いの場である。この点をハージは、「諸現実のもつれ(enchevêtrement des réalités)」というレヴィーブルの語を援用しながら、以下のように論じている。

いかなる社会空間も排他的に一般化された飼いならし、あるいは相互内在的／互酬的關係であるわけではない。わたしは飼いならし者として木に对峙し、それが自分にとつ

ていかに使えるか評価し、火が必要だから、あるいは家を建てる必要があるから切り倒しさえするかもしれない。それでもなおこのことは、それと同時にこの木がわたしに贈り物として自身を呈示しなかった、あるいはわたしがそれを贈り物として経験しなかったこと、もしくはわたしが木を見てそれが隣に存在するというだけで、より強く生を実感しなかったことを意味するわけではない。あらゆる社会関係は多元性のもつれである。わたしたちが今日、人種主義的で環境破壊的な支配の諸様式の拡散に抗するために必要としているのは、一般化された飼いならしの過剰支配をひっくり返すための、この多元性の回復なのである。

(Hage 2017: 123、強調は引用者。)

「人種主義的で環境破壊的な支配の諸様式」において、相互内在的／互酬的な存在様式はまったくないのでなく、飼いならしの過剰によって見失われている。多現実論に立ったハージの批判的人類学が目指すのは、飼いならしの根絶などではない。彼の批判の主眼は、飼いならしに本質的な問題があるのだと主張することではなく、そのみでは他者との関係構築が立ちゆかないのだと指摘することにある。

自己を過剰に支配する存在のありようを、別様の世界のあり方を知ることを通して相対化し、覆い隠された潜在的な現実を浮き彫りにする。この作業によって、単一の存在様式に

過剰に規定された多現実の均衡を取り戻すことこそ、ハージの批判が目指すところなのである。

五 結語

以上本稿では、「異質な他者といかに関係を築くか」という問いを出発点として、この問いをめぐる多文化主義批判と批判的人類学が協働しうる地点を示すため、ハージの批判理論を再構成してきた。具体的にはナショナリズムや多文化主義思想の批判と、存在様式をめぐる批判的人類学が、ハージの研究においてどのように結びつくかを示した。彼は一見対極的な包含と排斥の双方に通底する統治論理を「飼いならし」として概念化し、それがどのような社会空間を構成しており、その内では他者性がどのように経験されているかをとらえようとしてきた。そして飼いならしを存在様式という次元で突き詰めていった先に、当然視された飼いならしの過剰支配を問題化する、批判的人類学を展開しているのである。

だが以上のような本稿の議論については、本稿が前提とする問いそのものに対して、他者像の構築をめぐる疑問が提起される。すなわち、この問いは「異質な他者」の存在を指定したうえで立てられているが、そもそも「異質な他者」とは何者か、この問いは本来明瞭に切り分けられない人々のあいだに、思考の産物である自己／他者の二分法を押しつけて

いるではないか、といった疑問である。本節では、本稿が再構成したハージの批判理論の性格をあらためて確認しながら、こうした疑問に応えていきたい。そのうえであらためて、ハージの批判的人類学、とくにその多現実論が、異質な他者との関係構築法の探究に与えうる示唆を明確化する。

五・一「他者」をめぐる

ハージの批判的人類学を規定する方法論は、実際に人類学の他の諸研究と共有されるものである。批判的人類学の根幹には、「他者性を真剣に (seriously) 知る」ことを求める知的態度がある (Hage 2015: 94)。具体的に、この「真剣さ」とはどのような態度を意味するのか。

この真剣さとは反対に今日では、「憎しみ」と同様、他者性の「尊敬」や「寛容」が安易な試みにされてしまっている。これはとりわけ理解し難い、他者のまさに他者たる性質、かれらの根源的な他性 (alterity) を効果的に回避あるいは単純化することである。このような環境においては、他者性を知らうとする人類学の欲望の一部であるこの真剣さは特別な、知的、というだけでなく、政治的な重要性を帯びるのである。 (Hage 2015: 95 強調は引用者)

他者性を憎むべきもの、あるいは尊敬し寛容に受け入れる

べきものと一面化して排斥／包含する安易な誘惑に抗し、自己とは根本的に異なる他者のありようを知ろうと苦闘する。こうした意味で他者性と真剣に向き合う実践の知的・政治的重要性は、立場や議論の力点の違いを越えて、現代に生きる他の人類学者たちにも共有されている (e.g. Viveiros de Castro 1998; de la Cadena 2015: 273-86)。

だがこうした議論に対しては、次のような疑問を提起しうる。すなわち、「他者性を真剣に知る」という主張の背後には明瞭に切り離された自己／他者像があるが、そもそもそのように二者を全体論的に分離させることなどできるだろうか、という疑問である。実際この疑問に対し、ハージの議論は脆弱なものにみえる。その脆弱さは、彼が「他者性を真剣に知る」ことを人類学の中核的エートスとして位置づけるまさにそのとき、あらわになる。ここではハージが、「再帰的転回 (reflexive turn)」と呼ばれる人類学の自己批判論と対比させながら、自身の立場を明示している箇所を検討してみよう。

再帰的転回はそれ自体の諸問題を生み出した。これが問題なのはとくに、人類学における圧倒的に最も重要な功績に対して、再帰性が補足というより代替となるところである。その功績とは、人類学者自身と読者の内に、他者性を、真剣に知る欲望と能力を注ぎ込むことである。たしかに

マリノフスキは、彼が自身の試み全体をそのうえに打ち立てていたところの可能性の植民地的諸条件に気づかなかった点で、ナイーヴであった。しかしそのことは、彼の圧倒的に最も重要な功績、つまり「他者性を真剣に知ろうとする欲望」を実行に移すことのできる、厳密で体系的な方法の基礎を築いた功績を、いささかなりとも小さくするのかわ。たとえば自己再帰性の海に溺れることは、他者性へと真剣に手を伸ばそうとするその欲望に比べて、少しも「反植民地的」ではない。(Hage 2015: 94-5、強調は原文)

この文章は、「自己再帰性の海に溺れる」あやうさに対する重要な問題提起をおこなっていると同時に、再帰的転回に関するハージの認識の浅さを露呈してもいる。ハージが再帰的転回として想定しているのは、人類学の「植民地的諸条件」を問いなおす批判であり、これは「根本的に……社会学的／政治的批判であった」(Hage 2015: 74)と総括されている。だがこのような特徴づけによってとらえられるのは、人類学における自己批判の一部分でしかない。

この自己批判には、少なくとも二つの波が見分けられる(Escobar 1993: 377-8)。一つはとくに一九六〇年代末前後から強力に提起された批判であり、人類学に「未開」のフィードルの探究という植民地主義的心性がいまだに内面化されていること、あるいは人類学の営為が「西洋」と「第三世界」

の権力関係のうえに存立しているという政治社会的構造があること、などを問いかえすものであった(Fox 1991: 2-3)。

対して一九八〇年代に生じた二つ目の波は、人類学を外的に支える植民地的諸条件を問うにとどまらず、人類学研究の営み自体に対するより内在的な疑問を投げかけた。すなわち、フィールドに「溶け込み」「他者」のありようを記述する民族誌の営みに対し、全体化された形で表象される「他者」像の構築性や歪曲、他者と自己(人類学者)を明瞭に切り離すこと自体の不可能性が鋭く問いかえされたのである。

この第二波まで含めて人類学における自己批判の歴史を想起するならば、ハージが前提とする「再帰的転回」像の狭隘さがみてとれる。ハージが例にあげているプロニスワフ・マリノフスキを切り口とすれば、第二波において問題化されたのは、彼の民族誌研究が植民地的諸条件を背景としていたということだけではない。たとえば第二波の批判を牽引した論者のひとりであるジェイムス・クリフォードは、マリノフスキのそれを含めた「未開人」の民族誌が、文書化して保存しておくべき「消えゆく他者」を指定したうえで、その文化や生き方を「救い上げる(salvage)」というイデオロギーに則っていた点をあらためて指摘している。クリフォードはこうした態度が消えてきていることを認める一方で、変容していく他者のありようを固定化する「救い上げ」の寓話が、いまだに民族誌を規定していると指摘した(Clifford 1986:

ハージが批判的人類学のエートスとして称揚する「他者性」を真剣に知る欲望」はたしかに、自社会を相対化する批判を活性化させる、重要な原動力となってきた。だが同時に、この欲望はいずれ消えゆく真正な「他者」を指定し、その文化や生き方を標本のように留めて蒐集する欲望と併存してきたこともまた事実である。それは人々の流動的な現在を知ろうとするよりも、「民族」や「文化」に本質的に備わった性質を、その人々の背後に構築することへとつながった。

そして人類学における自己批判の第二波が背景としていたのは、「ポスト近代性」や「グローバル化」と呼ばれた越境的な流動性の増幅のなかで、「あちら」にいる不動の「他者」という像の虚構性が増します。明らかに、この流動的な状況下で人類学の試みをいかに再確立するかということが、第二波の批判が追究した問いだったのである。ハージが人類学の歴史に根ざした批判理論の確立を目指すならば、他者を知ろうとする実践を手放して称揚するのではなく、人類学における自己批判の歴史に対してもより真摯に応答し、人類学的研究実践が有する問題性をどうとらえるのか明示することが求められるだろう。

五・二 政治的分断を前に

ハージの批判的人類学の学術的根拠づけについては、前項

で検討したような課題が残る。だがその一方で、ハージが「他者性」を真剣に知る「ことの重要性を知的にというだけでなく、政治的にとらえていることをあらためて強調したい。

「自己」と明瞭に切り離された固定的な「他者」は、たしかに虚構に過ぎず、人々のあいだには自己／他者と切り分けられない歴史的・社会的関係性がある。だが同時に、一節で確認したように、自己／他者が集合的に明瞭に切り分けられ排斥の対象となる事態が、現代社会であまねく存在していることもまた確かである。このように、人々のあいだに政治的に引かれた境界線とそれを土台になされる暴力的排斥、そのポピュラーな求心力を前にして、自他の集合的な線引きなど不可能という主張はどれほどの実践的効力を有するのだろうか。

本稿が対象とし、ハージが一貫して対象としてきたのはこのように、自他が集合的な形で強固に切り分けられてしまう政治的状况なのである。ハージは、ムスリム／キリスト教徒という区分けが戦闘的な集合性を帯びたレバノン内戦を分析対象とする博士論文以降、パレスチナの人々が壁で仕切られた劣悪な環境下に置かれるガザ、中東・アジア系移民が集合的な排斥と包含にさらされるオーストラリアといった、人々が暴力的に集合化され分断される社会状況を問題化してきた(Hage 1989)。彼は自他が鋭く隔てられる事態を前にして、その構造や動態を解析することで窮状打開の糸口を探る批判

と同時に、支配的な状況の定義によって見出し難くなっている現実の可能性を引き出す批判的人類学を構想している。

はじめられたばかりのこの挑戦が、どの程度の実践的効力をともなった批判を展開しうるかは、いまだ不透明である。しかし異質な他者との関係構築法を探究する本プロジェクトにとって、ハージの批判理論、とくにその多現実論は、重要な道しるべを与えてくれる。存在は身体を介して多くの現実を同時に生き、そのもつれ合いのただなかにいるのだという多現実論は、単一の現実のみを拾い上げる関係構築法の限界を喝破している。

他者の「文化」の表層を取り込み象徴的次元で消費するに過ぎないという、批判的諸研究が明るみに出してきた多文化主義思想の性質は、つまるところ多文化主義思想が現実の多次元性に対応したものとなっていない、という原理的問題に根ざしている。ハージが飼いならしとして概念化し、多現実論によって乗り越えようとしているのは、多文化主義思想を規定するこの単次元性なのである。

他者性が要請するのは、もはや同一性に基礎を置いた文化的差異の「承認」に関する「事柄」ではなく、人間が価値ある生と考えるものの全体性を追求める方途の、複数性を受け入れる能力なのである。(Hage 2011b: para.35)

このように述べるとき、ハージは他者との関係構築をめぐる思考を、多元性のとらえ方という原理的水準から再構築していくことを求めている。人は誰しも、単一の現実のみに規定される生を送ってなどいない。集合的な他者の排斥においては、人々が生きる多現実の内の一部のみが拡張され、この単純化された生を基準に自他像が作り上げられ、敵／味方といった敵対的二分法によって切り分けられてしまう。

こうした事態を前にして求められるのは、単一化された他者像への「寛容」や「承認」をうたい、その像にあてはまらない他者性を否認する多文化主義思想ではなく、生の多現実的な全体性を受け止めることのできる思想ではないだろうか。本稿がハージによる批判的人類学の試みに見出したのは、このような、多文化主義思想の限界を乗り越えていく探究の再出発点である。

注①多文化主義は移民や先住民を植民国家へと統合する政策であるとともに、教育や労働の場において異質性を問題化する言説でもあり、より根底的には、「社会は多様な人々から構成されている」とする社会的状況の再定義であった。直接的には一九六〇・七〇年代に高じた社会運動の波への応答のなかで生起してきたこの一連の理念・実践・思考様式を、本稿では総じて「多文化主義思想」と呼ぶこととする。多文化主義概念の用語法や政治・社会的背景との連関については、鈴木(二〇一七)に整理されている。

② ホワイトを通常の意味での白人と同義にみなす誤読を止すなかで、たとえ肌の色において「白人」であっても、たとえ貧しい野宿者がテレビで「寛容に」と語られているのを見てそれが自分に呼びかけられていると感じるだろうか、とハージは問っている (Hage 2001: 248)。

また、ホワイトの概念は「ノルベルト・エリクス・ド・エール・ブルデューの「文明化」「文化資本」概念を土台にしている。彼らの諸概念を援用するのは、それらが身体性に注目しているからである。「ホワイト」や三節で論じる「飼ひならじ」といったハージの概念は、単に想像上の概念というわけではなく、身体感覚と強く結びついたものとして特徴づけられる。ポストドクターの時期にブルデューのもとで学んだハージは彼の考え方に強く影響を受け、「つねに身体や」それが位置づけられる社会空間のイメージをもって諸概念を組み立ててきた。この点は、四・三項でみるハージの多現実論においても同様である (Hage 2015: 72-3)。ブルデューの影響については Hage (2011a) に詳しい。

③ こうした状況としてハージが具体的に意識しているのは、たとえばイスラエルの定住植民地支配下に置かれたパレスチナの状態である。そこでは自律性を求める政治的闘争が、批判的な知識生産においても重要性を帯びていっている (Hage 2015: 79-87)。

参考文献

安達智史、二〇一三、『リベラル・ナショナリズムと多文化主義

———、イギリスの社会統合とムスリム』勁草書房。

Althusser, Louis, 1968, *Lévine et la Philosophie*, Paris: Francois Maspero. (=2001, Ben Brewster, trans., *Lenin and Philosophy and Other Essays*, New York: Monthly Review Press.)

Clifford, James, 1986, "On Ethnographic Allegory," James Clifford and George Marcus eds., *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, Berkeley: University of California Press, 98-121.

de la Cadena, Marisol, 2015, *Earth Beings: Ecologies of Practice across Andean Worlds*, Durham, London: Duke University Press.

Escobar, Arturo, 1993, "The Limits of Reflexivity: Politics in Anthropology's Post-Writing Culture Era," *Journal of Anthropological Research*, 49: 377-91.

Fox, Richard G., 1991, "Introduction: Working in the Present," Richard G. Fox ed., *Recapturing Anthropology: Working in the Present*, Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press, 1-16.

Gordon, Avery F. and Christopher Newfield eds., 1996, *Mapping Multiculturalism*, Minneapolis, London: University of Minnesota Press.

Hage, Ghassan, 1989, "The Fetishism of Identity: Class, Politics, and Process of Identification in Lebanon," unpublished PhD thesis, Macquarie University.

———, 1996, "The Spatial Imaginary of National Practices: Dwelling-Domesticating/

- Being-Exterminating," *Environment and Planning D: Society and Space*, 14(4): 463-85.
- , 1998, *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*, Annandale: Pluto Press.
- , 2001, "Beyond the Intention of the State," *Ethnicities*, 1(2): 245-9.
- , 2011a, "Social Gravity: Pierre Bourdieu's Phenomenological Social Physics," Ghassan Hage and Emma Kowal eds., *Force, Movement, Intensity: The Newtonian Imagination in the Social Sciences*, Victoria: Melbourne University Press, 80-92.
- , 2011b, "Multiculturalism and the Ungovernable Muslim," Raimond Gaïa ed., *Essays on Muslims and Multiculturalism*, Melbourne: Text Publishing.
- (Retrieved January 1, 2017, http://www.academia.edu/download/16673630/Multiculturalism_and_the_Ungovernable_Muslim.pdf)
- , 2015, *Alter-Politics: Critical Anthropology and the Radical Imagination*, Carlton: Melbourne University Press.
- , 2017, *Is Racism an Environmental Threat?*, Cambridge: Malden: Polity Press.
- Marcus, George, 2002, "Beyond Malinowski and After *Writing Culture*: On the Future of Cultural Anthropology and the Predicament of Ethnography," *The Australian Journal of Anthropology*, 13(2): 191-9.
- Povinelli, Elizabeth, 2002, *The Cunning of Recognition: Indigenous Alterities and the Making of Australian Multiculturalism*, Durham: London: Duke University Press.
- Sahlins, Marshall, 2013, *What Kinship Is-And Is Not*, Chicago, London: University of Chicago Press.
- 鈴木起生¹ 二〇一七「マルチカルチ・エス・イズム」再考——包括的な社会理論的検討のために」『京都社会科学年報』二五：三三—五六。
- Viveiros de Castro, Eduardo, 1998, "Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism," *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, 4(3): 469-88.
- Žižek, Slavoj, 1993, *Tarrying with the Negative, Kant, Hegel and the Critique of Ideology*, Durham: Duke University Press.
- 付記 本稿の執筆にあたって、ガッサン・ジョゼフ・ハージ教授ご本人には、未出版の博士論文を快くシェアしていただいた。加えて執筆過程では、二名の査読者の方々と京都大学文学研究科の山下嗣太さんからいただいた鋭く的確なコメントに、大いに助けられた。とはいえ本稿に誤謬があることすれば、それらはむしろすべて筆者に帰責される。
- 以上の方々に、記して感謝申し上げます。
- (すずき たけお・京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

Disavowal of Otherness in Multiculturalist Thought

—Learning from an Endeavour of Critical Anthropology—

Takeo SUZUKI

Graduate School of Letters, Kyoto University

E-mail: suzuki.takeo.23x@st.kyoto-u.ac.jp

This article problematizes a paradoxical situation whereby otherness is disavowed in multiculturalist thought, which promotes inclusion of others, and argues that a critical anthropology perspective can contribute to critiquing and going beyond such limitation of multiculturalist thought. This work is part of a larger research project aimed at establishing a field of creative collaboration among different spheres of knowledge in order to respond to the question: How can we build relations with different others?

As an approach to that goal, the article reconstitutes the study of anthropological critical theorist Ghassan Hage. Hage, who is known for his trenchant critique of multiculturalism, has not only clarified theoretically the continuity of exclusion-containment of others but has also searched for social relations that are not imprisoned in this set of governmental apparatus. It is an anthropological approach to know fundamentally different otherness that is activated in this search. By adopting a critical anthropological perspective, Hage finds an approach to alternative ways of building relations with others. This essay articulates his seemingly distant critique of multiculturalism and critical anthropology, finding a key concept of “domestication” as the point of articulation.

Finally, in examining the question against Hage’s arguments, the positionality of these arguments and my argument is made clear. Arguments which presuppose a distinction between self and other can be questioned as follows: Is there such a clear distinction as it is? Is it not the case that such presupposition itself gives rise to needless divisions among people? While recognizing that question, the essay reconfirms that, in the background of the arguments, there are political situations whereby “we” and “they” are violently divided. It concludes that the critical anthropology of Hage, especially its multi-realities theory which suggests a reconceptualization of multiplicity, highlights a restarting point for critical theory which struggles to go beyond the limitation of multiculturalist thought.

Keywords: otherness, domestication, multi-realities theory